HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Session7. 生理と成長
Author(s)	坪田, 敏男
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 14
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91575
Type	report
File Information	session7.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

SESSION Ⅶ. Physiology and Growth
生理と成長

坪田敏男

7題中、麻酔に関するものが2題、血液成分が1題、冬眠生理が1題、繁殖生理が1題、体重・体長に関するものが2題であった。

生け獲りにしたクマに発信機を装着したりその他の作業を行う上で、麻酔は最も重要な位置を占めるので、麻酔薬に関する研究報告は今までの会議録の中にもいくつかみられた。そういった中で、今回はsernylanという新しい麻酔薬についての研究発表があった。現在、クロクマ、ヒグマともに麻酔には、ketamine-xylazineの混合薬が使われることが多いが、1回の使用量が多いことそして薬が高価なことを考えると、もっと安価でかつ安全性の高い薬が研究者に望まれているのであろう。もう一つの麻酔に関する発表として、xylazineの拮抗薬であるyohimbineについて報告された。野外において、クマの本来の活動にできるだけ支障を与えないため麻酔後の回復を早めることは重要なことであり、そのために、この薬を使うのは有効であると報告者は考えている。

他に興味をひいた発表として、グリズリー289頭の体重・体長を計測し、年齢・性・仔連れの有無による差を調べた研究発表があったが、その結論として、メスについてみれば高エネルギー食物を得たメスは低エネルギーのものに比べて体重が多くなり、初産年齢が低く産仔数も多い傾向があると述べられた。現在、メスにおける栄養と繁殖との関係に多くの研究者が興味をもっている。その解明のための方法の1つとして、体重と繁殖との関係を突いた点で今回の発表は注目に値する。

血清成分、冬眠生理についての研究は数こそ少ないが着実に延びているといえよう。ただ、今回日本から坪田が報告を行った繁殖生理（エゾヒグマにおける血清プロゲステロン値の変化と胎仔の発育）、または今回発表されなかった消化生理についての研究はほとんど開拓されていない分野であり、今後興味ある話が続々と出てくると思われる。

蛇足ではあるが、このSESSIONが最終日に発表されたことで個人的に質問をする機会がなかったことが残念であった。